

Ubuntu 導入のいくつかのモデル

Ubuntu をどのように企業に導入するのか、そのソリューションは無数に考えられます。規模、時期、目的、予算、既存環境など、様々な要因によってあらゆるパターンがあり得るでしょう。ここでは、仮想的にそのうちのほんの一部のパターンを列記してみます。

個別的導入

Ubuntu 導入に差し支えないユーザーから順に、ユーザーの使用するハードウェアの状況に応じて Ubuntu を導入していきます。具体的にはブラウザ、メーラー、オフィス統合ソフトの使用でほぼ業務が事足りる部署でレガシーな OS (たとえば Windows XP) を使用しているユーザーを選んで、使用しているパソコンに Ubuntu をインストールします。この際、マシンのスペックをチェックし、スペックがあまりに低いユーザーにはメモリの増設等の対応をし、そういった対応でも業務に支障が出ると判断した場合にはハードウェアの買い替えも視野に入れるべきでしょう。

導入のフロー

1. 業務内容のチェック (Windows に依存した業務ではないかどうかのチェック。特にマクロの使用は要注意です。)
2. ハードウェアのチェック (クロック数およそ 1GHz 以上、メモリ搭載量およそ 1GB 以上、ハードディスク空き容量およそ 15GB 以上。これは Ubuntu 公式の推奨最低スペックよりも高めですが、シンクライアントとしての使用以外では、通常のオフィス業務にはこの程度のスペックがあったほうがいいでしょう)
3. データのバックアップ。同時に、Windows のディスククリーンアップとデフラグもやっておくべきでしょう。もしも Windows そのものの調子がよくないようなら (そして Windows を併用したいのであれば)、この機会に Windows の再インストールもやっておくとよいでしょう。
4. Ubuntu のインストールディスクの準備。公式サイトから CD イメージをダウンロードし、CD-R に焼きます。CD ドライブのないマシンであれば、ブータブル USB を用意します。
5. Ubuntu のインストール。このとき、Windows のブックマーク等をインポートできます。
6. 環境設定。たとえばオフィス内のプリンタの設定、IP 固定のローカルネットワークの場合はネットワーク設定など、一定の知識が必要な設定はシステム管理者側で行う必要があります。フォントの追加など業務上必要なプログラムの追加もこの時点で行うべきです。
7. 特殊なデータのインポート。たとえば過去メールのデータのインポートなどは、知識のある管理者が手動で行う必要があります。
8. ユーザーへの引渡しと、チュートリアル。ブラウザ、メーラー、オフィス統合ソフト程度であれば、アプリケーションの UI はほとんど Windows の使用と同じですので、シャットダウンの方法やシステム設定の方法、ファイルの場所 (Windows 領域を残した場合、以前使っていたファイル類はそのまま Ubuntu からアクセスできます)、自動アップデートの考え方と対応方法など、基本的なインストラクションで十分でしょう。
9. 追加サポート。たとえばアプリケーションの名称の違いによる混乱 (「メモ帳はどこにあるの?」) やディレクトリ構造の戸惑い (「Document and Settings はどこ?」)、アプリケーションの微妙な機能や UI の違いなどが、トラブルの原因として考えられます。個別の対応が必要になるでしょう。
10. 以上の導入を、順次繰り返していきます。

個別的導入の利点と欠点

- 順次導入していくので、導入担当者(システム管理者)の作業が集中しない。問題が一気に噴出することもなく、小さな問題の解決の積み重ねで全体の最適化が可能。
- Ubuntu と Windows 環境が同じ部署内で混在することになるので、業務に若干の混乱が予想される(「なんでこのパソコンではこんな表示になるの?」「ファイル形式がおかしくて読めません」など)。また、異種 OS 混在環境で業務をスムーズにこなしていくためのノウハウが必要となる。

部署別の導入

部署ごとに時期を決め、部署内のパソコンを一気に Ubuntu に入れ替える方法です。この場合、その部署の業務が Ubuntu で完全にこなせるかどうかを慎重に事前調査しておく必要があります。特に経理部門や製造部門など、特定の Windows アプリケーションに依存した業務を行なっている部署では、代替アプリが存在するか(そしてそれが使用に耐えるものか)、あるいは仮想環境や Wine を利用して Ubuntu 上で使用可能か、もしくは Linux 環境への移植が可能かなど、業務に使用が出ないよう予め十分に検討と試験を重ねておく必要があります。

導入のフロー

1. 部署内の業務内容全般のチェック。全員の業務とそれに使用しているアプリケーションやツールを詳細に調査しておく必要があります。
2. ハードウェアのチェック。特に仮想環境を使用しなければならないマシンでは、メモリや CPU 処理能力に余裕があることが必須。
3. データのバックアップ。部署全体として必要なデータの整理を同時に行うと効果的です。
4. 管理用マシンの用意。部署全体で Ubuntu を導入する場合、ネットワーク内に全ての Ubuntu マシンを管理するための管理者用パソコンを用意しておくこととアップグレードやカスタマイズの管理などが容易に行えます。
5. Ubuntu のインストールディスクの準備。管理者に専門的スキルがあれば、全パソコンを同時にネットワークインストールすることも可能でしょう。そうでない場合は、同時に作業できる台数分だけの複数のインストールディスクを用意しておいたほうが作業効率が上がります。
6. 環境設定。管理者用パソコンを用意した場合、そこから全 Ubuntu マシンの環境を一気に整えることができます。その準備をしていない場合は、個別に設定する必要があります。
7. 個別のパソコンの設定。マシンのスペックが揃っていない職場では特に、個別にドライバの設定やシステム設定の微調整を行わなければうまく動作しないマシンが混在している可能性があります。こういった問題を個別に解決します。
8. ユーザーへの引渡しとチュートリアル。部署全体での導入の場合、個別のデータを管理者が個別にインポートする余裕はないので、インポート方法を含めてかなり詳細な説明会を開く必要があるでしょう。
9. 導入後の不具合の調査と対応。個別の質問項目は全員が閲覧できる FAQ にまとめていくと便利です。

部署別の導入の利点と欠点

- 環境が部署全体で変わるので、十分な事前説明と理解があればユーザーに受け入れられやすい。
- 異種 OS 混在環境ではないので、ネットワーク構成や周辺機器の利用に関してトラブルが起きにくい。

- 一気に導入するので、うまくいかなかった場合に業務への支障が大きい。最悪の場合、数日間の業務停止が発生する。
- 管理用マシンにインストールする Ubuntu は有償の専用エディションになるので、コストが発生する。

ハードウェア更新にあわせた導入

既存のパソコンを再利用するのではなく、新たなパソコンを購入する際に OS として Ubuntu を選ぶ方法です。コスト削減的な意味はほとんどないのでいまのところ一般的な方法ではありませんが、大規模な導入の場合、ハードウェアベンダーに一括発注することで Windows のライセンス料をいくらか削減できるかもしれません。

この方法の利点は、新しいパソコンで新しい UI や新しいソフトが登場するのはユーザーにとって受け入れられやすいことです。Windows 8 マシンを新たに使いはじめるのと Ubuntu マシンを新たに使いはじめるのと、おそらくユーザーの戸惑いと受容は同じようなものでしょう。さらに、個別のパソコンの特徴によるチューニングが不要になるため、システム管理者にとっては手数のかからない方法です。

この方法でも、個別にリプレース時期のきたパソコンから導入していくケースと部署ごと一括して導入するケースが考えられます。それぞれの長所と短所は、既存のパソコンの再利用と似たようなものになるでしょう。

シンクライアントとしての導入

コスト削減のため時代遅れのマシンを利用する方法として、レガシーマシンをシンクライアントに再定義する方法があります。これは、ネットワーク内に高性能のサーバーを 1 台設置し、各自の「パソコン」はそのサーバー上で動作するアプリケーションに接続するクライアント(端末装置)として動作するようにシステムを組み上げるものです。このような方法であれば、負荷の高い処理はサーバー上で行われ、個別のクライアントに必要とされる処理はネットワーク処理とモニタへの描画処理が中心になります。かなりスペックの低いレガシーなマシンでも十分に役立つことでしょう。

シンクライアントとしての導入の利点と欠点

- 主要な処理がサーバーで行われるので、メンテナンスはサーバー中心に行えばよく、その点で管理がしやすい。
- ネットワーク管理者に専門的知識が必要になる。
- ネットワークから外れたパソコンは、「タダの箱」になる。